

子どもの描画活動における「動き」の表現の発達と ナラティブ描画

平 沼 博 将

Children's Development of Drawing of 'Motion' and Narrative Drawing

HIRANUMA Hiromasa

はじめに

子どもたちの描画表現に関する研究は、これまで、様々な学問領域において数多くなされてきた。心理学の領域でも、知能や概念研究、精神分析といった分野において研究が行われたが、これらの研究の問題点は、子どもの描画を、子どものもつ知識や概念さらには無意識までもを忠実に表すものとして捉えたことにある。心理学における子どもの描画研究の近年の成果の一つは、子どもの描画を、心の状態やイメージがそのまま紙の上に置き換えられたものと見なす考え方から解放したことといえる。なかでもFreeman,N.や彼の業績を受け継ぐ研究者達は、描画過程の詳細な分析によって、描画活動が複雑な問題解決過程を含んでいることを豊かに実証した(Freeman,1972 ; Freeman&Hargreaves,1977 ; Freeman&Cox,1985 ; Thomas&Tsalimi, 1988 ; Thomas&Silk,1990)。けれども、彼らの研究は、人物や静物などの形態がどのように描かれるのかといった問題を扱ったものが中心であり、なかでも最近の描画心理学の主要なテーマは、Duncum(1993)が指摘するように、対象の「奥行き」や「遮蔽」といった三次元的位置関係を二次元(平面)である紙の上にかんして描くかといったものとなっている。

しかし、実際に子どもたちの描画活動を観察していると、子どもたちが、その過程において「描こうとする対象の形態をどのようにして表現するか」という問題ばかりでなく、「描こうとする対象の時間的变化をどのようにして表現するか」といった問題にも直面していることに気づく。Cox(1992/子安訳,1999)は、「子どもたちは時々、人物が動いているか、場所を移ろうとしていることを示すしや手がかりを、絵の中に入れることがある」と述べているが、筆者も子どもたちが「遠足」「運動会」「ボール遊び」といった生活経験を絵に描く際に、動作や場面の変化といった「動き」を描画で表現しようとして、様々な工夫を凝らしている姿をしばしば見かける。

例えば、図1-1は、Iちゃん(5歳2ヶ月)が描いた「運動会の絵」であるが、自分が「棒のぼりをしているところ」を描こうとして苦労した様子が見てとれる。また、図1-2は、「ボールでもぐっているところ」をいつもとは違った人物の描き方で表現したかったHちゃん(5歳

3ヶ月)が、担任の保母さんと一緒に考え、工夫して描いた絵である。このように、子どもたちは、身体イメージをより明確にもてるようになるにつれ、「〇〇しているところ」を言葉で表現するだけでなく、絵の中にも表現したいという欲求が高まってくるようである。しかし、子どもたちが絵に動きを与えるための工夫はもっと多様である。図1-3を見ると、Aちゃん(5歳1ヶ月)は人物の動きをととても巧みに描いているが、手首足首を振っているところ(右上)や、先生が笛を吹いているところ(左上)を「動きのサイン」や「文字」を用いても表現している。また、形態に変化を加えなくても、図1-4のSくん(4歳8ヶ月)の「遠足のときの絵」のように、「はんで蚊がブーンってとんできたんや」といって蚊の動きを、まるでその動きを再現するかのように一本の線で表現することもある(蚊は十字型で表現されている)。

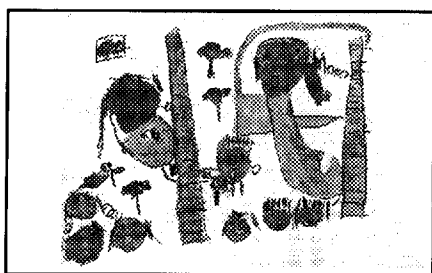


図1-1:「棒のぼりをしているところ」
Iちゃん(5歳2ヶ月)

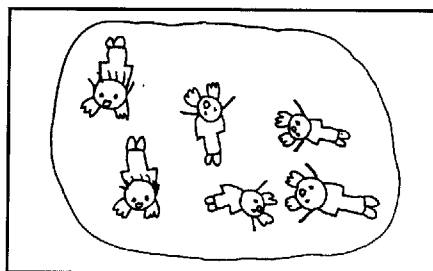


図1-2:「プールでもぐっているところ」
Hちゃん(5歳3ヶ月)

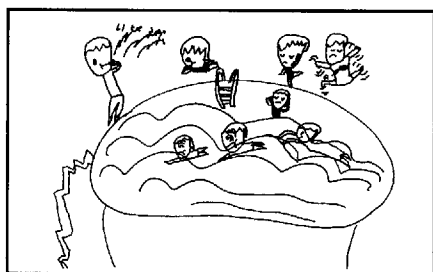


図1-3:「プール遊びのときの絵」
Aちゃん(5歳1ヶ月)

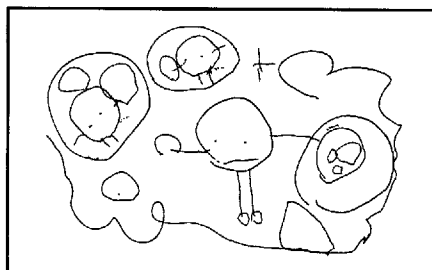


図1-4:「遠足のときの絵⁽¹⁾」
Sくん(4歳8ヶ月)

このように、子どもたちは様々な手法を用いて、対象の動きを描画で表現しようとするが、こうした描画の例は、多くの子どもたちの絵の中に見つけることができる。そして、保育園や幼稚園などで行われている描画活動では、園による違いはあるものの、視覚的に正しく描く事を目的とした「観察画」や「写生画」よりも、子どもたちが自身の経験を描き、物語ることを目的とした「生活画」への取り組みがカリキュラムの中心となってきたように思われる。新見(1995)は、戦後の美術教育運動の歴史を振り返りながら、「生活画こそが幼児期の描画活動の中心であるべきことが保育関係者の共通認識となってきた」と述べているが、こうした状況における実践的意義からしても、子どもたちの描画活動における「動き」の表現の研究の必要性、重要性を強く感じる。

それにも関わらず、子どもたちがいかにして絵で物語るのか、つまり、「描こうとする対象の時間的変化をどのようにして表現するのか」というテーマは、最近の心理学の研究ではあまり取り上げられていない。しかし、対象の「奥行き」や「遮蔽」を表現するというのが、「対象の三次元的位置関係を二次元空間である紙の上に表現する」という複雑な問題解決過程を経なければならないと同様、「対象の時間的な変化を一枚の絵としてまとめる」ことにも、様々な問題解決を必要とするに違いない。そう考えると、これまで見過ごされてきた感のある「動き」の描画表現の研究は、子どもたちの描画活動における心理状態や認知過程を明らかにしていく上で、新しい視点を提供してくれるのではないだろうか。

本論文では、子どもたちの描画活動における、動作や場面変化といった「動き」の表現に関する先行研究を紹介しながら、残された課題について考察する。そして、「動き」の描画表現に関してこれまで手薄であった幼児の研究について、その発展の可能性を探っていきたいと思う。

1. 「動き」の表現の発達に関する先行研究

1.1. 人物画の動作表現の発達

描画における「動き」の表現を扱った研究として、まず挙げられるのが「人物画の動作表現」に関する研究である。そこでは、子どもたちがいつ頃から人物画を変化させて「動き」を表現できるようになるのか、また、その表現方法はどのような発達過程をたどるのかということが議論されてきた。この問題について、1970年代を中心に一連の実験研究を行ったのがGoodnow, J.である。彼女は、子どもたちが人物の動作を描画で表現する際、人物画のどの部分が修正されにくい(されやすいか)を発達的に検討した。

まず、Goodnow (1977/須賀訳,1979) は、5歳から10歳の子どもたちを対象に、「歩く人」と「走る人」を描き分けさせる課題を与え、人物画のどの部分が修正されるのかの発達的変化を調べた(図2)。その結果、最も年少の子どもたちは胴体は直立したまま脚の幅を広げることで速さの違いを表現し(a)、より年長の子どもたちになると脚を曲げることで表現した(b)。しかし、胴体の軸にまで変化が及ぶのは最年長の9、10歳児になるまで待たなければならないことが示された(c)。また、髪や衣服をなびかせたり(d)、動きを示す線(e)によって表現する子どももいた。

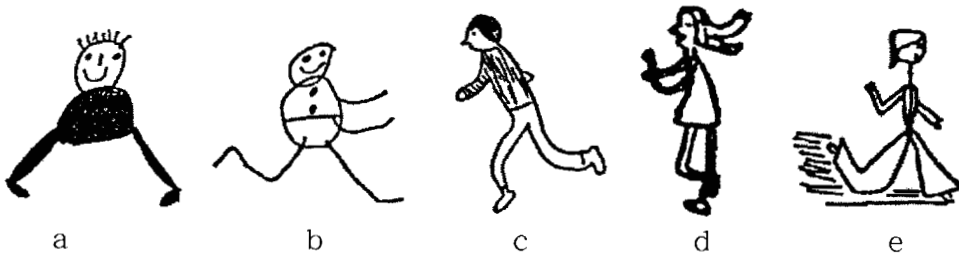


図2：子どもたちの「走る人」の描画表現の例 (Goodnow,1977)

また、Goodnow (1978) は、4歳から10歳の子どもたちを対象に「身をかがめて、ボールを拾う人」を描かせた(図3)。その結果、4、5歳児では、人とボールを単に隣り合わせて描く(a)、ボールの位置や個数を修正する(b)、一方の腕のみを長くする(c)などの手法が観察された。そして、6、7歳児になると胴体は直線的であるものの腕は横から出るようになり(d)、7歳以降では手首や膝にまで変化が及ぶことが示された(e)。

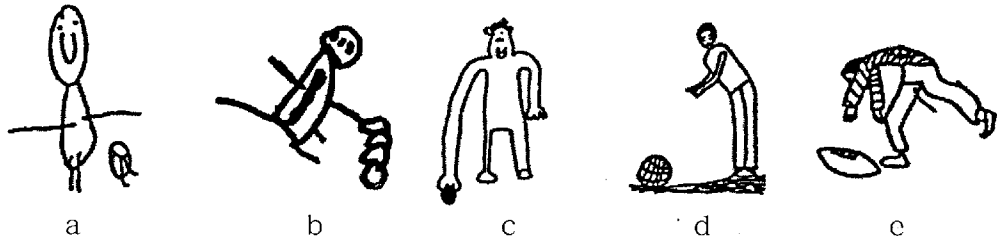


図3：子どもたちの「身をかがめて、ボールを拾う人」の描画表現の例 (Goodnow, 1978)

Smith (1993) は、4歳から10歳の子どもたちが、人物画のどの部分を変化させて、「じっと立っている人」と「とても速く歩いている人」を描き分けるかを調べた。結果はGoodnow (1977) とほぼ同様のものが示され、4、5歳の幼児は、脚の角度や歩幅を変えることはできたが、それ以外の部分には変化が見られなかった。

また、藤本 (1979) は、幼稚園年長児 (6歳) から小学6年生 (12歳) の子どもたちに「走っている私 (ボク)」を想像して描くという課題を与え、顔・肩・腕・膝の表現方法を詳細に分類し、その発達の傾向を調べた。その結果、幼稚園児はそのほとんどが、正面向きの顔、まっすぐな腕と脚を描いたが、1年生では顔を横向きに描いた者が半数を超えた。さらに、2年生になるとどちらかの腕や膝を曲げて表現する者が半数を超えた。しかし、両脚の奥行き表現が可能となるのは6年生にならなければ難しいことが示された。

更に、Cox&Lambon Ralph (1996) は、5歳、7歳、9歳の子どもたちに、人物画の向きを意識させるために「まっすぐこちらを向いて立っている人」、「右を向いて立っている人」、「右に向かって走っている人」の3枚の人物画を描かせた。しかし、教示で人物の向きについての情報を与えても、5歳の子どもたちの3枚の人物画には、目立った違いがほとんど見られなかった。

このように、人物画の動作表現の発達に関する実験研究からは、年齢が上がるにつれて、人物画のより多くの部分で修正がみられることが示され、また、9歳以降になると遠近法による表現も可能になってくることが観察されている。しかし、幼児の場合、人物画の修正による人物の動作表現はみられたものの、歩幅を変えたり、手を長く描いたりといったごく一部分の修正にとどまっている。このことから考えると、幼児の場合には人物画そのものを修正するというよりも、Goodnow (1977, 1978) で報告されたような、対象の位置関係や個数を変えたり、動きの線を描いたりすることで、絵の中の人物に「動き」を与えることが多いのかも知れない。

1.2. 構図による場面変化の表現

先程述べたように、子どもたちは人物画など、形態画そのものを修正するという以外にも、対象の動作や場面の变化といった「動き」を描画で表現する方法を知っている。その一つが描画を構成する要素の位置関係、つまり「構図による表現」である。そして、子どもたちのこうした表現方法に最初に注目した研究者はおそらくLuquet, G.H.であろう。

Luquet (1927/須賀沢, 1979) は、子どもたちが描画の中で、動的で変化を伴う情景をどのように描くのかを記述し、こうした描画表現を「物語が言葉でなすところを線で行くもの」として「絵物語 (narration graphique)」と名付けた。絵物語を描くためには、「一刻一刻の継時的な光景を、同時にあらゆるものが動くことなく存在し続ける絵というものに移しかえる」という問題を解決しなければならないが、Luquet (1927) は次の3つの解決方法があると指摘している。

まず、第一の解決法は「刻々移り変わる行為なり場面なりの中から最も重要で、話の全体を象徴するような場面をつだけ抜き出して描き出す」というもので、Luquet (1927) は「象徴型 (type symbolique)」と呼んだ。いわゆる、挿し絵画家がよく使う手法である。図4はLuquet (1927) が象徴型の一例として示した7歳になる男の子の描画であるが、同時に以下に示すような物語も付記している。つまり、彼は、この物語全体を最も象徴すると考えた「たくさんの牛が走って来て、一番向こう側に熊がいる」という場面を描いたのである。



図4：象徴型の描画例(Luquet, 1927)

ある日、ラルフは納屋の方へ歩いて行った。彼は大きな物音を聞いた。彼は何の音か確かめに走って行った。あちこちから一斉に牛が走ってくる。一頭の大きな熊が見えた。彼は母屋へ走って父に知らせた。父がかけつけて熊を殺した。

第二の解決法は、物語の個々の場面に対応した幾つかの部分的な絵を結合させるという手法である。Luquet (1927) は、この手法がエピナール版画⁽²⁾に頻繁に用いられたことから「エピナール型」と呼んだが、いわゆるコマ漫画の手法である。図5はLuquet (1927) がエピナール型の例として挙げた「アリスと鷺鳥のピータ」と題する描画である。



図5：エピナール型の描画例(Luquet, 1927)

Luquet (1927) は、これら二つの解決法は子どもたちにみられるとともに、大人の描画表現にも一般的にみられる方法であると述べているが、第三の解決法として次に挙げる「継時混淆型 (type successif)」は、子ども独自のものであるという。Luquet (1927) は継時混淆型を「時間の経過とともに次々と転変する諸要素を同時に一つの絵にまとめる手法」と定義しているが、更にこれには「反復型」と「無反復型」という二つの亜種があり、反復型の亜種は「一定

時間特に目立つ動きを示さない構成要素は一回しか描かれないが、変転する構成要素は何度も描かれる」が、無反復型の亜種は「どの構成要素も一度しか描かれない」という特徴を持つ。図6と図7にLuquet (1927) が挙げた描画例をそれぞれ示す。

Luquet (1927) は、これらの絵物語の型の発達も、「知的写実性から視覚的写実性へ」という発達から説明し、継時混淆型は次第にみられなくなると指摘しているが、これらの解決法を可能とする発達の要因については言及していない。

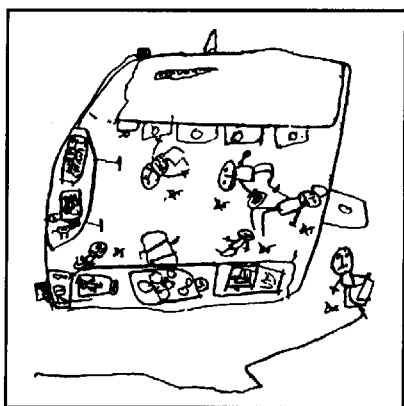


図6：継時混淆反復型の描画例
「お店の中の婦人」, Luquet (1927)

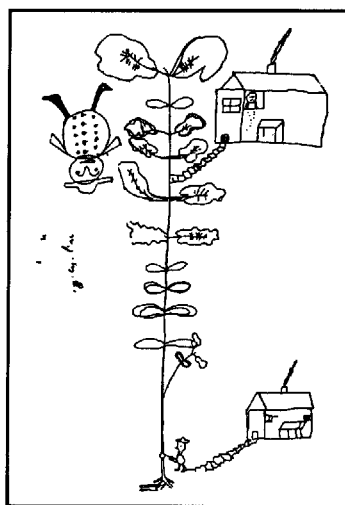


図7：継時混淆無反復型の描画例
「ジャックと豆の木」, Luquet (1927)

1.3. 身振りや書字による「動き」の表現

ここまでは、「動き」の描画表現に関する主要な研究について紹介してきたが、大別すると Goodnow (1978,1979) に代表される「人物画の動作表現」に関する研究と Luquet (1927) に代表される「構図による場面変化の表現」に関する研究があった。しかし、子どもたちは絵ですべてを表現するわけではない。子どもたちがその描画活動において、多くの事を言葉や身振りで表現したり、時には、絵の中に文字を書くことで「語る」ことは、これまでも多くの研究者たちが指摘している (Выготский, 1929-30 ; Werner & Kaplan, 1963 ; 田中, 1977 ; Dyson, 1990 ; Butler, Gross & Hayne, 1995 ; 平沼, 1998)。

例えば、図8の描画は、レナという少女が描いたものであるが、彼女はレイチェルと一緒に宝探しごっこを楽しみながらこの「宝の地図」を描いた。ごっこ遊びの過程で、宝の在処を「Yes」という文字で示しているのが分かる (Dyson, 1990)。このように絵の中に字が含まれることは子どもたちの絵にはよく見られることであるが、特にこの例のような遊びの中で描かれる絵で文字がよく使われるということ

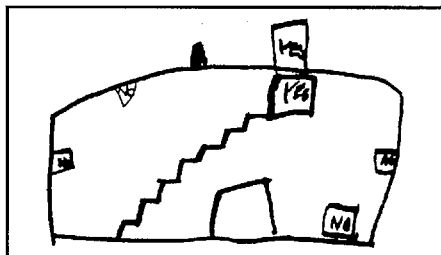


図8：レナの「宝の地図」(Dyson, 1990)

があるかも知れない。

一方、身振りと初期の描画との関係については早くから着目され、興味深い観察例が数多く報告されている。

Выготский (1929-30/柴田訳, 1975) は、「子どもは絵を描いているうちに劇化に移ることがしばしばあり、絵で描かなくてはならないことを身振りで表現してしまう」と述べている。そして、その一例として次のSternの観察事例を挙げ、「描かれたその動きは、カーテンの紐をあらわしているのではなく、それはまさにカーテンを引く動きをあらわしている」と解説している。つまり、ここで描かれた線は、描画と言うよりはむしろ身振りといった方がよいのかも知れない。

「ある4歳児はカーテンをしめるとどのように暗くなるかを絵の中で示そうとして、ちょうど窓掛けを下げるかのように画面の上から下へ元気のいい線を引いた。」

Sternの観察事例より

また、田中(1977)は3歳児から5歳児を対象に「電車」を描画させたところ、3歳児の多くは錯画を描き、身振りと発話によって電車を表現したという。このように、子どもたち、特に幼児期の子どもたちの描画活動においては、形態のみですべてを表現しようとするのは少なく、むしろ描画以外の身振りやことばといった他のシンボルを用いて、描画に意味を与えていることが多いように思われる。

更にWerner&Kaplan (1963/柿崎訳, 1974) は、幼児の身振りと描画との興味深い関係を示すMuchowの観察事例を紹介している。

「ある3歳児は、いくつかの直線図形が提示された後、円を模写するように言われると、まず頬をふくらませ、それから非常に大きな円を描いたのであった。またもう一人の子どもも、自分の前に提示された鋭角三角形を模写するように言われると、まず舌を前に突き出す動作をしてから、鉛筆で紙を破いてしまう程鋭くその鋭角を描いたのであった。この子の描画の様子は、あたかも目の前にある三角形が、まずさっと突き出すといった身体動作によって把握され、それからそれを身体的に描出したかのようであった。」

Muchowの観察事例より

この事例からは対象を描画によって表現する前に、対象の有意義性を身体動作によってひとまず作り上げてから、課題として求められた描画へと移っていく様子が見てとれる。そして、最終的に描かれる描画は「身振りで描出したものをさらに描画に翻訳したもの」といえるだろう。つまり、こうした身振りは描画に意味を与えるものというよりも、むしろイメージを生成する機能を果たしていると考えられる。こうしてみると、一概に「身振り」といっても、その機能的役割から、幾つかの型に分類される可能性が示唆される。

平沼(1998)は、ノートパソコンで提示した動画刺激(球が様々な運動をするもの)を3歳から6歳の子どもたちに描かせるという課題を実施した。そして、描画場面での身振りを、その機能的役割から分類し、その発達の特徴を調べた。その結果、イメージを生成する機能を果

たすと考えられる身振り(描画前の身振り)は年少児群(平均年齢4歳1ヶ月)でより多く見られることが示された。一方、年長児群(平均年齢5歳10ヶ月)では、描画後に描いた絵を説明するための身振りがより多く観察された。

1.4. シンボル使用の個人差と発達の特徴

このように幼児期における描画は身振りや言葉といった他のシンボルと密接な関係にあると言える。茂呂(1988)は、こうした子ども独特の表現系のことを「癒着した表現系」と呼び、「慣用的な表現媒体を獲得する前の段階では、幼児は全身的で癒着した表現系を利用して何かを表そうとする」と述べている。そうであるならば、幼児期の描画発達を考えるとき、最終的に画用紙の上に残されたものだけを研究対象とするのではなく、描画、発話、身振りといったそれぞれのシンボルをどのように組み合わせて表現するのかといった観点が不可欠といえよう。

ところで、描画と他のシンボルとの関係を考える上で触れなくてはならない問題に個人差の問題がある。ハーバード・プロジェクト・ゼロの中心メンバーであるGardner, H. (1982/仲瀬・森島訳, 1991)は、12人の子どもたちが様々な象徴材料(symbolic media)で自由に遊んでいるところを7ヶ月以上にわたり観察したところ、彼らに大きな個人差があることに驚かされたという。Gardner (1980/星訳, 1996)は、モーリーとマックスという2人の子どもを例に挙げ、描画活動において豊かな動作や言葉で絵の単純さを補うモーリーを言語型(のちにドラマティストと再記述)、絵そのものがドラマであり、どのように描くのかに苦悶するマックスを視覚型(のちにパターナーと再記述)と呼び、シンボル使用の個人差を記述した。そして、こうした個人差はGardner (1982)が「パターナー的装いとドラマティスト的装いの間を揺れるように見える子どももいる」と述べていることからすると、決定的なものではなく、一種の認知スタイルの違いのようなものといえるかも知れない。

しかし、描画の中で意味づけが始まる2歳ごろのいわゆる「丸のファンファーレ」の時期や、4, 5歳ごろの詳細な描き込みをする時期など、ドラマティスト的、パターナー的装いが発達の特徴としてみられることもある。

また、木原(1990)は、自閉症児のおさむ君の描画の変遷について興味深い報告をしている。図9(左)は、おさむ君が5歳のときに描いた電車であるが、遠近法を用い、詳細に描かれている。一方、図9(右)はおさむ君が周囲の人たちとコミュニケーションがとれるようになってきた小学2年生の頃に描いた絵である。描画技術にだけ目を向けると明かに5歳頃の描画のほうが高度であるといえよう。

しかし、描画を介して言葉で人とやり取りができるようになったおさむ君にとっては、絵ですべてを語る必要がなくなったとも解釈できるのである。

これまでの描画の発達段階からは説明がつきにくいおさむ君

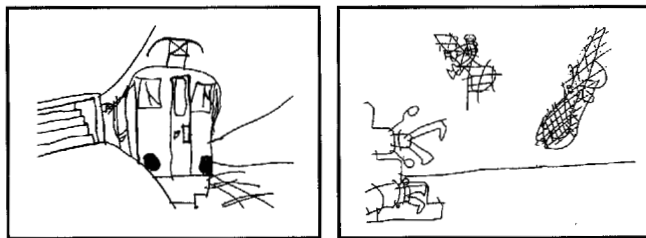


図9：おさむ君の描いた絵：5歳の頃の絵(左)と小学2年生の頃の絵(右)(木原, 1990)

のような事例は、我々が、子どもたちの描画活動の意味について改めて考える機会を与えてくれると同時に、発話、身振りといった他のシンボルと描画との関係について、個人差、発達差などの観点から総合的に検討する際の重要な視点をも提供してくれている。

2. ナラティブ描画のタイプと発達の傾向

2.1. Duncum, P. によるナラティブ描画の分類

Duncum (1993) は、描画表現の範疇を子どもたちが完成させた描画だけでなく、その描画過程や意図、身振り表現にまで広げることで、Luquet (1927) が絵物語と呼んだ表現方法以外にも「動き」の表現が存在することを指摘している。そして、子どもの絵に関する心理学研究、美術教育研究の中から絵物語に相当するような事例を集め、それらを構成要素の空間構成と子どもの意図を手がかりに、次のような10タイプに分類し、「ナラティブ描画 (narrative drawing)」と呼んだ。

- (1) 動きの図示 (Graphic Action)
- (2) 身振り (Physical Action)
- (3) 重ね描き (Superimposition)
- (4) 反復 (Repetition)
- (5) 並列 (Juxtaposition)
- (6) 出来事の図示 (Graphic Event)
- (7) 出来事の継時図示 (Sequence Graphic Event)
- (8) 出来事の同時図示 (Simultaneous Graphic Event)
- (9) 続き漫画 (Comic Strip)
- (10) 離れたもの (Separate Object)

このうち、Luquet (1927) の象徴型に対応するのが「(7) 出来事の継時図示」、エピソード型に対応するのが「(9) 続き漫画」である。また、継時混淆反復型、継時混淆無反復型にそれぞれ対応するのが「(4) 反復」と「(5) 並列」である。Duncum (1993) はこれら4つに関してはLuquet (1927) の分類と完全に一致していると述べているので、分類基準とその具体例については省略する。

その他の叙述タイプを順にみていくと、「(1) 動きの図示」は、描こうとする対象の動きを描線によって表現するというものである(図10)。また、「鳥が飛んでいる」といって手首を素早く動かして線を引いたAnaの事例(Duncum, 1993)のように対象そのものが描かれない場合もあるという。

「(2) 身振り」は描いたものを身振りで動かしたり、身体動作で物語る表現であるが、Duncum (1993) は次の2歳7ヶ月のジェリーの事例(Gardner, 1980)がこれに当てはまるという。

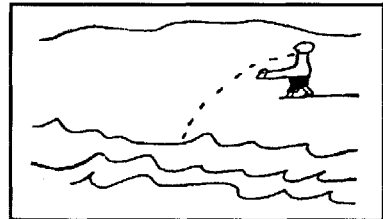


図10:動きの図示の描画例 (Cox, 1992)

一連の線と点を描いてから私に「これはピーターパン。手を叩いて。そしたらティンカーベルはオーケーだよ」と告げた。

Gardner (1980) の観察事例より

つまり、この場合、手を叩くという身体動作が叙述の一部になっているというわけである。先程述べた田中（1977）の電車を動かすような身振りの例や、「ボールが消えた」ということを、描いた円を手で隠すことで表現した平沼（1998）の例もこれに当てはまるであろう。

次に、「動きの図示」に似た「（3）重ね描き」であるが、これは対象が場面か

らいなくなるなどを表現する際にみられる描画である。既に描かれた線を点線で上書きしたり、錯画で塗りつぶすなどして「消える」という対象の変化を表そうとするものである。Dyson (1990) の観察例である小学三年生のミッティの物語の終わりを錯画で表現した例（図11左）や田中（1991）の観察例である戦闘場面を描いた8歳男児の例（図11右）にもこうした表現が見られる。

また、「（8）出来事の同時図示」は空間的な関連性のある複数の出来事を一枚の絵に図示するものがある。そして、叙述のすべてが図示されているという究極のナラティブ描画が「（6）出来事の図示」である。つまり、子どもたちが戦闘場面を描き「戦っているところ」といえば、それは戦っている事を叙述した描画ということになるのである。

最後に「（10）離れたもの」というのは、対象以外のものを描くことで、その対象について叙述することである。例えば、馬を描き、その足下に少し傾いた横線を描くことは、その馬が「坂道を上っているところ」を叙述したことになる。

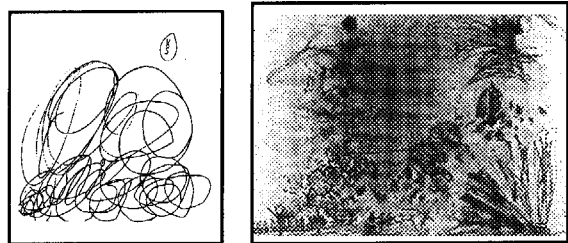


図11:重ね描きの描画例

（左:「物語の終わりの錯画」(Dyson,1990),
右:「戦闘場面の描画」(田中, 1991))

2.1. ナラティブ描画の発達の傾向

Duncum(1993)はまた、これら10タイプのナラティブ描画を列挙するだけでなく、その発達の傾向も指摘している。まず、年長児には見られないものとして「動きの図示」、「身振り」、「繰り返し」、「並列」を挙げ、その反対に年少児には見られないものとして「続き漫画」を挙げている。そして、これら以外のタイプは全般に見られるものとしている。ここでの、年長児、年少児がそれぞれが何歳頃を指すのかは明らかではないが、引用された事例の年齢から推測すると、年長児は学童期ごろ、年少児は幼児期ごろを指しているようである。また、これらの発達の傾向はあくまで子どもたちが自発的に描いた描画から推測したものであり、統制された条件下での調査や実験を行った研究はほとんどない。

平沼（1998）は、4、5歳の幼児を対象に「走っている電車（車）」と「転がっているボール」を描くという2つの課題を実施した。動いている電車（車）を描いた子ども（13名）の内、描画に何らかの動きの表現がみられた子どもは4歳児2名、5歳児5名の計7名であった。表現手法としては、動きを表す線を描く（図12-1）、電車を複数描く（図12-2）、線路を描く（図12-

3) などがみられた。また、転がっているボールを描いた子ども(14名)のうち、描画に何らかの動きの表現がみられた子どもは4歳児4名、5歳児3名の計7名であった。表現手法としては、動きを表す線を描く(図13-1)、ボールを複数描く(図13-2)、坂道を描くなどがみられ、それらを組み合わせる者もいた。また、ある女児(4歳10ヶ月)は、描画の中に擬態語を文字で書き、動いている様子を表現した(図13-3)。

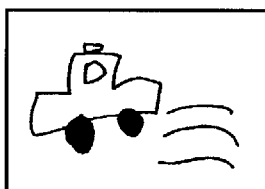


図12-1 動きの線
(5歳8ヶ月：女児)

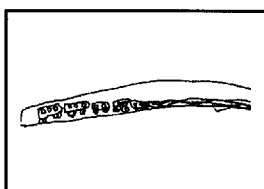


図12-2 複数描く
(5歳6ヶ月：男児)

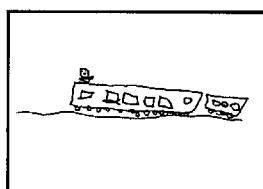


図12-3 線路を描く
(5歳10ヶ月：男児)

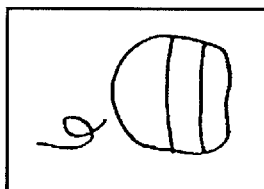


図13-1 動きの線
(5歳6ヶ月：女児)

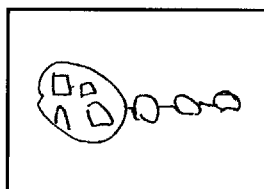


図13-2 複数描く+動きの線
(5歳10ヶ月：男児)

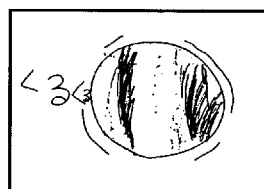


図13-3 書字+動きの線
(4歳10ヶ月：女児)

このように、「走っている電車(車)」「転がっているボール」課題ともに、約半数の子どもたちの描画で何らかの動き表現がみられた。Duncum (1993) の分類に従うと、「(1) 動きの図示」、「(4) 反復」、「(10) 離れたもの」が両課題において共通してみられ、それらを組み合わせた表現をする者もいた。また、Dyson (1990) が指摘するような書字というシンボルを用いた者も観察されたが、幼児ということもありごくわずかだった。また、描画後に動きを説明する子どもが多くいたが、その際に、擬態語を伴って動きを表したり、「こっち」と方向を指示したり、描いたボールや電車を動かしたりする「(2) 身振り」も観察された。この2つの課題からは、ナラティブ描画の発達の傾向は明らかにされなかったが、両課題で同じ表現方法を用る者が多いという特徴がみられた。

3. 研究の課題と展望

本論文では、子どもたちの描画活動における「動き」の表現に関するものとして、「人物画の動作表現の発達」、「構図による場面変化の表現」、「身振りを中心とした他のシンボルと描画との関係」についての研究や事例を紹介し、その成果と課題について述べてきた。さらに、これまでの研究を整理していく上で有効な概念となりうるものとして、Duncum (1993) の「ナラティブ描画」を紹介した。

こうしてみると、描画活動における「動き」の表現の研究は、決して数は多くないもの

の、大人のそれとは違った、子どもの描画活動の独自性を解明する上で、興味深い視点を与えてくれている。なかでも、茂呂(1988)が指摘するような「癒着した表現系」をもつと考えられる子どもたちが、描画、身振り、言語といったシンボルをどのように組み合わせながら様々な表現活動を行うのか、また、それらが、どのような過程をたどりながら表現手段として独立していくのかといった観点からの研究は、認知心理学における心(知性)のモジュール性の議論にも貢献できるものと考ええる。しかし、その為には今後、描画、身振り、言語といった各研究分野の相互交流はもちろん、共通の問題意識に立った総合的な検討が行われる必要がある。そういう意味で「ナラティブ描画」という概念は、今後の議論の出発点となりうると考える。

しかし、ナラティブ描画は子どもたちの描画活動の中でよく観察はされるものの、こうした描画表現を実験的に引き出すことは容易ではない。平沼(1998)は、「球」という、低年齢の子どもでも描くことができ、かつ、その形態を変化させることで「動き」を表現することが難しい刺激を用いることで、ナラティブ描画を引き出そうとしたが、実験場面という制約のもとで、いかにして子どもの表現意欲を引き出すかなど多くの課題が残された。今後はこのテーマについての実験、調査、事例研究といった研究が数多くなされることを期待するとともに、真の子ども理解をめざす心理学のための新たな方法論を、常に模索していく必要があると考える。

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、丁寧に御指導くださった子安増生教授に、厚く御礼申し上げます。また、本論文で紹介した、子どもたちの貴重な描画実践を快く提供してくださった、一乗寺保育所の清水尚美先生、たかつかさ保育園の薬子三恵子先生に心より感謝いたします。

註

- (1) 遠足のときの絵：「おべんとう食べてる。ウィンナーと目玉焼きと三角おにぎりと。横になおちゃんとふうちゃんがいた。ほんで蚊がブーンってとんできたんや。」
- (2) エピナール版画：フランス東北部、ボージョ山脈の西麓の都市エピナールで作られる伝統的な色彩版画。子女のしつけや童話、ナポレオン伝説などが主題に取り上げられた(大辞林第二版より)。

文 献

- Butler, S., Gross, J. & Hayne, H. 1995 The effect of drawing on memory performance in young children. *Developmental Psychology*, 31 (4), 597-608.
- Cox, M.V. 1992 *Children's Drawings*. Harmondsworth: Penguin Books. (モリー・コックス 子安増生(訳) 1999 子どもの絵と心の発達 有斐閣)
- Cox, M.V. & Lambon Ralph, M. 1996 Young children's ability to adapt their drawings of human figure. *Educational Psychology*, 16, 245-255.
- Duncum, P. 1993 Ten types of narrative drawing among children's spontaneous picturemaking. *Visual Arts Research*, 19 (1), 20-29.
- Dyson, A.H. 1990 Symbol makers, symbol weavers: How children link play, pictures, and print. *Young Children*, 46 (1), 50-57.
- Freeman, N.H. 1972 Process and product in children's drawing. *Perception*, 1, 123-140.
- Freeman, N.H. & Hargreaves, S. 1977 Directed movements and the body-proportion effect

- in pre-school children's human figure drawings. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, **29**, 227-235.
- Freeman, N.H. & Cox, M.V. 1985 *Visual Order*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press.
- 藤本浩一 1979 運動姿勢描画の発達的研究 教育心理学研究, **27** (4), 18-25.
- Gardner, H. 1980 *Artful scribbles.: The significance of children's drawings*. New York: Basic Books. (ガードナー, H. 星三和子 (訳) 1996 子どもの描画—なぐり描きから芸術まで 誠信書房)
- Gardner, H. 1982 *Art, Mind and Brain*. New York: Basic Books. (ガードナー, H. 仲瀬律久・森島慧 (訳) 1991 芸術, 精神そして頭脳—創造性はどこから生まれるか 黎明書房)
- Goodnow, J. 1977 *Children's Drawing*. London: Fontana/Open Books. (グッドナウ, J. 須賀哲夫 (訳) 1979 子どもの絵の世界—なぜどのように描くのか—サイエンス社)
- Goodnow, J. 1978 Visible thinking.: Cognitive aspects of change in drawings. *Child Development*, **49**, 637-641.
- 平沼博将 1998 動きの情報伝達場面における幼児のシンボル使用の発達的变化—描画と身振りの関係を中心に— 京都大学教育学研究科修士論文 (未公開)
- 木原久美子 1990 表現がひらかれていく過程を見る 心理科学研究会 (編)『僕たちだって遊びたい』ささら書房
- Luquet, G.H. 1927 *Le dessin enfantin*. Paris: Alcan. (リュケ, G.H. 須賀哲夫 (監訳) 1979 子どもの絵—児童画研究の源流— 金子書房)
- 茂呂雄二 1988 認知科学選書16 なぜ人は書くのか 東京大学出版会
- 新見俊昌 1995 幼児期の美術教育の到達点と課題—美術教育運動の歴史をふまえて— 季刊保育問題研究, **153**, 4-18.
- Smith, P.M. 1993 Young children's depiction of contrast in human figure drawing: standing and walking. *Educational Psychology*, **13**, 107-118.
- 田中義和 1977 幼児の描画における表現手段の発達的研究 日本教育心理学会第19回総会発表論文集, 406-407.
- 田中義和 1991 イメージの発展を楽しむ遊びとしての描画活動 『遊びの発達心理学』(山崎愛世編) 萌文社 pp.64-85
- Thomas, G.V. & Tsalimi, A. 1988 Effects of order of drawing head and trunk on their relative sizes in children's human figure drawings. *British Journal of Developmental Psychology*, **6**, 191-203.
- Thomas, G.V. & Silk, A.M. J 1990 *An introduction to the psychology of children's drawings*. Hemel Hempstead, Herts.: Harvester Wheatsheaf.
- Выготский, П. С. 1929-1930 *Предистория письма менной речи*. (ヴィゴツキー, L. S. 柴田義松・森岡修一 (訳) 1975 書きコトバの前史 『子どもの知的発達と教授』 明治図書)
- Werner, H. & Kaplan, B. 1963 *Symbol formation*. New York: Wiley (ウェルナー, H.・ Kaplan, B. 柿崎祐一 (監訳) 1974 シンボルの形成 ミネルヴァ書房)
- (博士後期課程2回生, 教育認知心理学講座)